

新人看護職員研修ガイドライン到達目標の修正内容

別紙 1

【看護職員として必要な基本姿勢と態度についての到達目標】

※修正箇所には下線を記載

★：1年以内に経験し修得到達を目指す項目
 到達の目安 I：できる II：指導の下でできる

旧				新				
項目	★	到達の 目安		項目	★	到達の 目安	修正の理由	根拠となる データ
患者の理解と患者・家族との良好な人間関係の確立	★	I		患者の理解と患者・家族との良好な人間関係の確立	★	I	○行動を表現する文言として「わかりやすい説明」に修正。	
③患者・家族が納得できる説明を行い、同意を得る	★	I		③患者・家族にわかりやすい説明を行い、同意を得る	★	I		
組織における役割・心構えの理解と適切な行動	★	II		組織における役割・心構えの理解と適切な行動	★	I	○組織の一員として、理念を理解し職務を担うことは社会人として必要であるため。	
①病院及び看護部の理念を理解し行動する	★	II		①病院及び看護部の理念を理解し行動する	★	I		
④同僚や他の医療従事者と安定した適切なコミュニケーションをとる	★	I		④同僚や他の医療従事者と適切なコミュニケーションをとる	★	I	○安定していることも含めて適切と評価すべきものであり、「安定した」は不要である。	

【技術的側面：看護技術についての到達目標】

★：1年以内に経験し修得到達を目指す項目
 到達の目安 I：できる II：指導の下でできる III：演習でできる IV：知識としてわかる

旧				新				
項目	★	到達の 目安		項目	★	到達の 目安	修正の理由	根拠となる データ
食事援助技術	★	II		食事援助技術	★	I	○嚥下状態の確認や誤嚥予防に関する観察や技術の習得は医療安全の観点からも新人看護職員でも必要。	【到達状況】 「I:できる」70.2% 「II:指導の下でできる」21%
②食事介助（例：臥床患者、嚥下障害のある患者の食事介助）	★	II		②食事介助（例：臥床患者、嚥下障害のある患者の食事介助）	★	I		
③経管栄養法	★	II		③経管栄養法	★	I	○最近の現場では点滴による栄養から、経口・経腸栄養への切り替えが早期に行われ、経管栄養法が多くなっている。	【妥当性】「妥当でない」16.9% 【到達状況】 「I:できる」70.9% 「II:指導の下でできる」16.7%
排泄援助技術				排泄援助技術				
②浣腸		I		④浣腸		I	○項目を臓器別及び難易度の順にまとめる。	
③膀胱内留置カテーテルの挿入と管理		II		③膀胱内留置カテーテルの挿入と管理		I	○膀胱内留置カテーテルを留置した患者の看護を行う場面は多く、安全な挿入と管理は重要である一方、各施設の状況の相違を考慮し、「★なしI」と設定する。	【妥当性】 教育担当者が回答した「妥当でない」18.5% 【妥当でない理由】 医療機関等の状況により差はあるが、「I」が妥当とする自由回答76件
④摘便		II		⑥摘便		II	○項目を臓器別及び難易度の順にまとめる。	
⑤導尿		I		②導尿		I	○項目を臓器別及び難易度の順にまとめる。	
②体位変換（例：①及び②について、手術後、麻痺等で活動に制限のある患者等への実施）	★	II		②体位変換（例：①及び②について、手術後、麻痺等で活動に制限のある患者等への実施）	★	I	○どのような療養の場でも必要となる基本的な技術であり、新人看護職員にもできることが求められることから「★ありI」とする。	【到達状況】 「I:できる」80.3% 「II:指導の下でできる」16.7% 【実施頻度】 「日常的にある」77% 「しばしばある」10.9%

旧			新				
項目	★	到達の目安	項目	★	到達の目安	修正の理由	根拠となるデータ
活動・休息援助技術		II	③関節可動域訓練・廃用性症候群予防		II	○医学大辞典や看護大辞典等において廃用性症候群という用語は使われていないため「廃用性」を「廃用」に修正。 ○難易度を考慮し、記載順序を並び替える。	
		II	④入眠・睡眠への援助	★	II	○卒業時の到達目標を考慮し、日中のみでなく1日を通じた支援の技術であり、どのような療養の場でも必要な技術であるため「★あり」とする。	【卒業時の到達目標】入眠・睡眠を意識した日中の活動の援助ができる→I
		II	⑤体動、移動に注意が必要な患者への援助（例：不穏、不動、情緒不安定、意識レベル低下、鎮静中、乳幼児、高齢者等への援助）	★	II	○どの療養の場においても高齢者・認知症患者は増加しており、必要性は高いため「★あり」とする。	【到達状況】 「I:できる」50%、 「II:指導の下でできる」40%
呼吸・循環を整える技術	★	I	②吸引（気管内、口腔内、鼻腔内）	★	I	○難易度を考慮しカッコ内を並び替える。	
		I	④体温調整	★	I	○卒業時の到達目標との整合性を考慮し、「★あり」とする。	【到達状況】 「I:できる」89% 「II:指導の下でできる」8.2% 【卒業時の到達目標】患者の自覚症状に配慮しながら体温調節の援助ができる→I
創傷管理技術	★	II	②褥瘡の予防	★	I	○体位変換を「★ありI」へ変更しており整合性を踏まえ、また新人看護職員でも自ら実施すべきであり、「★ありI」とする。	
与薬の技術		II	③静脈内注射、点滴静脈内注射		I	○実施者には安全かつ確実に実施することが求められる行為である。 ○施設により、実施者の取り決めが異なることから「I」（★はつけない）とする。	【到達状況】「I:できる」71.1%、 「II:指導の下でできる」16.9% 【妥当性】「妥当でない」19%。日常的に多い処置であり、設定が低い等の理由。「Iが妥当」86件。
		II	⑥輸液ポンプの準備と管理		I	○現場ではシリンジポンプも多用されているため、項目名に追加。 ○輸液ポンプ・シリンジポンプを使用している現場では、新人看護職員もできるようになることが必要であり、「I」とする。	【妥当性】「妥当でない」15%。日常的に使用頻度が高い。「Iが妥当」57件。 【到達状況】「I:できる」78.4%「II:指導の下でできる」16.9%。
	★	II	⑦抗生物質の用法と副作用の観察	★	II	○合成剤が多くなり抗生物質とは言わず抗微生物薬と呼ばれていることから、抗微生物薬に含まれ、かつ看護師が取り扱うことが多い薬剤名の例示に修正。 ○「用法」に対応する文言を追加。	「保健師助産師看護師国家試験出題基準」（平成26年版）の「必修問題」等の小項目に「抗生物質」「抗ウイルス薬」がある。
		II	⑧インシュリン製剤の種類・用法・副作用の観察		II	○「種類・用法」に対応する文言を追加。	
		II	⑨麻薬の副作用・副作用の観察		II	○「種類・用法」についての理解も必要であるため追加。	
			③廃用性症候群予防・関節可動域訓練				
			④入眠・睡眠への援助	★	II		
			⑤体動、移動に注意が必要な患者への援助（例：不穏、不動、情緒不安定、意識レベル低下、鎮静中、乳幼児、高齢者等への援助）	★	II		
			②吸引（口腔内、鼻腔内、気管内）	★	I		
			④体温調整	★	I		
			②褥瘡の予防	★	I		
			③静脈内注射、点滴静脈内注射		I		
			⑥輸液ポンプ・シリンジポンプの準備と管理		I		
			⑦抗菌薬、抗ウイルス薬等の用法の理解と副作用の観察	★	II		
			⑧インシュリン製剤の種類・用法の理解と副作用の観察		II		
			⑨麻薬の種類・用法の理解と副作用の観察		II		

旧				新					
項目	★	到達の 目安		項目	★	到達の 目安	修正の理由	根拠となる データ	
救命救急処置技術	②気道確保	★	Ⅲ	救命救急処置技術	②気道確保	★	Ⅱ	○一次救命に必要な技術であり、シミュレーションによる研修の実施も可能であるため、「Ⅱ」とする。	
	③人工呼吸	★	Ⅲ		③人工呼吸	★	Ⅱ		
	④閉鎖式心臓マッサージ	★	Ⅲ		④閉鎖式心臓マッサージ	★	Ⅱ		
	⑤気管挿管の準備と介助	★	Ⅲ		⑤気管挿管の準備と介助	★	Ⅱ		
	⑥止血		Ⅱ		⑥外傷性の止血		Ⅱ	○どのような技術を指すのか明確になるよう表現を追記。	
症状・生体機能管理技術	②身体計測		Ⅰ	症状・生体機能管理技術	②身体計測	★	Ⅰ	○部署の特性や病態に応じた計測は新人看護職員にも必要な技術である。 ○卒業時の到達目標との関連から「★あり」とする。	【到達状況】 「Ⅰ:できる」 90.3% 【実施頻度】 「日常的にある」 64.7% 「しばしばある」 14% 【卒業時の到達目標】 正確に身体計測ができる→Ⅰ
苦痛の緩和・安楽確保の技術	③リラクゼーション		Ⅱ	苦痛の緩和・安楽確保の技術	③リラクゼーション技法 (例:呼吸法・自律訓練法等)		Ⅱ	○どのような技術を指すのかわかりにくいため、具体的な内容を例示。	
	④精神的安寧を保つための看護ケア		Ⅱ		④精神的安寧を保つための看護ケア (例:患者の嗜好や習慣等を取り入れたケアを行う等)		Ⅱ	○どのような技術を指すのかわかりにくいため、具体的な内容を例示。	
感染予防技術	⑥針刺し事故防止対策の実施と針刺し事故後の対応	★	Ⅰ	感染予防技術	⑥針刺し切創、粘膜暴露等による職業感染防止対策と事故後の対応	★	Ⅰ	○針刺し事故防止のみでなく、医療安全上、空気感染、粘膜暴露などの防止対策を含める必要がある。	
安全確保の技術	③転倒転落防止策の実施	★	Ⅱ	安全確保の技術	③転倒転落防止策の実施	★	Ⅰ	○転倒転落は高齢者のアクシデントとして最も多く、防止は重要である。入院時から転倒転落に関連したアセスメントを行うための知識と技術については習得が必要。 ○病床規模に関係なく実施頻度が高く、「★ありⅠ」とする。	【実施頻度】 「日常的にある」 84.9% 「しばしばある」 7.4% 【到達状況】 「Ⅰ:できる」 72.7% 「Ⅱ:指導の下でできる」 24.6%
				死亡時のケアに関する技術	①死後のケア		Ⅲ	○超高齢化社会を迎え、新人看護職員研修においても実施すべき項目である。各施設の状況を考慮し、「★なしⅢ」とする。	

【管理的側面についての到達目標】

★:1年以内に経験し修得到達を目指す項目

到達の目安 Ⅰ:できる Ⅱ:指導の下でできる Ⅲ:演習でできる Ⅳ:知識としてわかる

修正項目がないため、到達目標の一覧表は省略